

## 政策評価に関する統一研修講義概要

平成30年1月16日開催

講義名：「エビデンス」と「評価」はなぜ政策現場で疎んじられるのか？

講師：東京大学大学院医学系研究科教授 橋本 英樹

講義時間：10時50分～11時50分

### <Evidence-based policy making (EBPM) 本格化>

2017年5月、統計改革推進会議最終取りまとめでは、EBPMの推進が必要であるとされた。これに基づき、昨年秋の「秋レビュー」での試行を受けて、現在、自己点検、そして公開プロセスに向けて、各府省で検討をいただいているところ。

ただ、現場では、どのような方法でどこまでやればよいか、腑に落ちないまま業務を遂行している方もいるかもしれない。そこで、なぜエビデンスが必要になるのか、そもそもエビデンス・ベースド・ポリシー・メーカーは何のためかを振り返ってみる必要がある。

### <Evidence-based medicine (EBM) >

エビデンス・ベースド・(何々)のはしりは、1980年代頃から言われ始めたエビデンス・ベースド・メディシンである。ベストのエビデンスを用いて、慎重に、明瞭に、そして開かれた意思決定をするために行うものである。誰もが公平に意思決定に参加することができるようにするために、科学的手続にしたがって得られたエビデンスが必要となる。

#### ○ 「統計」の種類と「データ」の種類

そのエビデンスで必要となる「数字」には、加工して作られた「統計」と、その統計を作るための元になる材料となる「データ」がある。統計を大きく分けると二種類。記述統計と分析統計である。記述統計は、平均値、分散、頻度や比率など現在の状態を示す数字である。それに対して、分析統計は、有意な関係や因果関係など関係性に関するものが分析統計である。因果関係を論じる時にどのような統計やデータをとるかが問題となる。

#### ○ 無作為化比較試験 (RCT)

我々が持っている数字(観察値)は、偶然の影響と見かけの影響の二つの影響を受けているものしかない。観察値は、真の値、系統誤差(バイアス)、偶然誤差(確率)の三つの成分で出来ている。バイアスの影響を減らすため方法として貴ばれているのが無作為化比較試験(ランダムイズド・クリニカル・トライアル(RCT))であり、偶然の制御するのが統計分析である。

理解していただきたいのは、バイアスを除いて確率の影響を受けないようにするこ

とがいかに大変かということ。だから、きちんと評価するためには、事前の準備をしなければならない。

また、RCTにも限界がある。時間や費用がかかり過ぎること、無作為割り付けにまつ倫理的な問題、理想化するのが難しい現実世界の条件が存在することである。

これらの問題を克服するためには、科学的数値だけではなく利害関係者の価値観のすり合わせ、医学的なベストバリューと患者の価値観をどのようにすり合わせていくか、つまりどう意思決定過程をシェアして進めていくが医療の現場では新たに求められるようになってきている、この議論はEBPMにも必要な議論となるだろう。

#### <エビデンスとは何か>

エビデンスとは、科学的手続である。科学的手続とは、再現可能で、誰でも、ある一定の手続さえ踏めば確認ができる開かれた手続であり、その意思決定に関わるステークホルダーたちがフェアな交渉に参加することができるようにする、一種の保証のための材料にすぎない。数字があれば、それで押し切れるというものではない。

しかし、数字があればたとえ判断を誤まったとしても、その影響を最小限にとどめ、次の改善につなげることができる。ポリシーは間違え得る、しかし、データさえ残っていれば改善する余地をいつでも残している、というのが、実はEBPMの一番のコアのフィロソフィーになる。

したがって、エビデンスは決して「the evidence」ではない。常に既存のエビデンスに従うのではなく、実践と評価を繰り返し、修正、加筆されていくオンゴーイングの数字である。

#### <ロジックモデルの種類と評価方法>

ロジックモデルには二種類ある。因果関係とその分析評価を意識した横ロジック図と、目的と手段の複合的連関を意識した縦ロジック図。

横ロジック図は、一般的に経済学者が行う分析型。それに対して、縦ロジック図は、主にビジネスの戦略を立てるときに使う目標志向型、戦略型。行政官がより多く使うのは縦ロジック図であり、一番重要なのは達成したい価値は何かを明確にすることである。

一方、評価の際は、因果関係を求められる。縦ロジック図と横ロジック図をどのように組み合わせて使うかが、工夫を求められている部分の一つになる。

#### <おわりに>

これがハウ・ツー・EBPMという唯一のものは、存在しない。

つまり、EBPMは、どうやるかではなく、なぜ必要なのかからスタートするのが良い。絶対の正解や失敗が存在せず、常に比較論なのである。そのためには、常に立ち戻れる何かを持っていなければならない、それがエビデンスとなる。様々なステークホルダーのバランスをとらなければいけないから、エビデンスが必要である。数字を見せることは、決してス

テークホルダーに突っ込まれるリスクになるとは限らない。ステークホルダーを説得するために使える材料である。

業務を遂行していく中で、様々な複雑なものを相手にしているがゆえに煩わしいことも多いが、煩わしいからこそE B P Mと呼ばれる手続を踏むことによって、自分自身の仕事を守ることができる、これがE B P Mの一番の根幹の哲学である。